

してこのかさぶたをひっぺがして、どんなにささいなことにも、どんなにつまらないことにも、すぐに涙を流し、そして笑い、そして怒れる私になりたいたものだ。一つ一つの役を演じながら、私は恐らく一生それと戦い続けねばならないのだろう。戦争というものは、きつと勝っても負けても残酷なものなのだ。その残酷な戦争を、二度と起こすことのないように願うのみである。

## みらい

神奈川県 内田 みさこ

### 一 生い立ち

この一文は、継母の虐めを逃れて新天地満州に渡り、夢破れ、動乱の中を生き抜いた、悲壮な半生録である。

「故郷は遠くにありて思うもの

そして悲しく唄うもの」

私は山口県厚狭町の山の中腹の小さな村で昭和四（一九二九）年三月に生まれ、子供時代はここで育った。昔は子だくさんの家が多かったが、私の村では子供の多い家は一軒だけ、井口という爺婆ちゃん夫妻と子供を入れて十人ぐらいの世帯であった。そんな子供の少ない所でも、放課後や休日にはだれかが集まって、隠れん坊や鬼ごっこをして遊んだ。

私が小学校に上がるとき、父はその子の性格と

いう記入欄に「お山の大将」と書いたそうだと。父は学校の教師で、国語と音楽を教えていた。妻運に恵まれず、私は二番目の妻の子であった。最初の妻は同じ教職にあったが、私と十九歳違う兄を残して逝き、その後私の母も三歳の私を残して、この世を去った。

女手の無い我が家は、祖母と子守りのまあちゃんと、父の兄に当たる伯父の五人の生活であった。その伯父とも布団に潜り込んだりして遊んでいたが、いつの間にか父と二人の暮らしになっていた。

私が小学校に上がる少し前に、父は三番目の妻を迎えた。その人は、結婚して東京のある女学校で裁縫の教師をしていたが、夫に死なれ故郷（山口県小月町）に帰っていたということであった。

行儀見習いに、毛利公のお邸に上がっていたことがあったと聞いた。なかなかの美人であった。五十歳を超す父は三十六歳の若い嫁を迎えて精気を養うためか、小船を漕いで沖に出て漁をし、鰻を釣って来ては自分で蒲焼きにして食卓に出し

ていた。

そんな健康に気配りをしていたはずの父が、現代医学では考えられないが、気管支喘息でこの世を去った。幸福に育っていた私に、不幸が始まったのはそれからであった。

三十六歳という女盛りの継母はその美貌もあってか、男の人が四六時中我が家に入出入りするようになった。そのころから「継母の虐め」が始まった。殴る、蹴る、つねるの毎日であった。田圃は朝鮮の人に任せていたが、畑は母一人で作っていた。私は肥料を自宅のトイレから汲み取り、坂を下って畑まで担いだ。学校からの帰りが遅くなっても、鶏に米糠に草を混ぜ与え、花の水やり、縁側の拭き掃除。少し大きくなると、日暮れになって山に薪を取りに行き、風呂を沸かすのが日課であった。ときには真夜中に起こされて、四十分もかかる競り市場まで、露や筍を背負って運ばされた。飼っていた鶏の卵は「母ちゃんは体が弱いから」と継母だけが食べ、私の口には入らなかった。

私はご飯に醤油をかけて食べた。熟し柿も、「母ちゃんのだ」と言つて、私は口にできなかつた。夜は、居眠りしながら渋柿の皮を剥いて、つるし柿を作つた。

ある日、私が遊び呆けて帰りが遅くなり叱られると覚悟していたが、継母は笑顔で「お帰り。ちよつと蔵からお米を出しておくれ」と、優しい笑顔に私はほつとして、すぐお米を取りに蔵の中に入った。するとその途端、蔵の扉が閉められた。私は大声で泣き叫んだ。だが、継母はわざとお茶碗の音を立てて夕食を食べていた。暗い蔵の中で、空腹と恐怖で私は叫び続けたが、何の反応もなかつた。私はもう死んでしまいたいと思い、「母ちゃん私出て行くから開けて」と怒鳴ったら、夕食を食べていた継母はいきり立って、「出て行きなけりゃ出てお行き」と重い戸を開けた。私は、思わず「ままはは」と叫んで飛び出した。私は転ぶように坂を下りた。私を見た井口のおばちゃんが、「どうしたん、みーちゃん！」と後を追つて来た。

家の近くに昔寝太郎さんという人が農民のために作つたという、厚狭川が流れていた。私は、その川に飛び込む決心でまっしぐらに走つた。おばちゃんに抱きとめられなかつたら、私は十一年の生涯を閉じていたであろう。おばちゃんに抱かれて、私は大泣きに泣いた。

## 二 悪戯っ子

隠れん坊で、汲み取り便所に落ちてしまった幸ちゃん。ただ茫然と立ちすくんでしまった。鬼ごっこ中に敏ちゃんを追い掛け、登つた柿の木の枝が折れて落下し、腕を骨折させたこともあつた。

遊び仲間が集まつて、マツチに火をつけて遊んだことがあつた。そのとき火のついたマツチをうっかり落とし、足元の藁に火がつき、風呂用に積んであつた焚き木に燃え移り、煙が上がり始めた。田圃で仕事をしていた村人が駆け付けて、消火して大事には至らなかつたが、私は後ろ手に縛られて制裁を受けた。

小学校三年生のころ、芳子ちゃんと貝掘りに玩

具のバケツを持って海に出掛けた。アサリを取った後、服を脱ぎ、脱いだ服を崖の隙間に突っ込んで泳ぎに夢中になった。潮の満ちるのは早い。気がついたときは潮がどんどん満ちてきて、私たちは慌てて丘に飛び上がったが、服はとっくに流されていた。私たち二人は、素っ裸で村二つを通って家に帰ったが、行き交う人たちが目を白黒させていた。家に帰ると、継母は烈火のごとく怒り、打つ、蹴るのお仕置きを受けた。体のどこにも凹凸の無い年齢であったのは幸いであった。

春に、村の入り口にある鎮守のお大師様のお祭りがあり、学校帰りの子供たちは婦人会接待のお赤飯とひじきの煮物を頂いた。最高においしかった。だが悪戯っ子たちは、その足で墓場に行き、バナナ、ぶどう、お団子などのお供え物を口にした。何と罰当たりなことをしたのか。

私の家の傍に大きな椎の木があり、実が通路にいっぱい落ちていた。登下校の途中、その実をスカートポケットに詰め込んで、食べながら歩いたこともあった。

たこともあった。

家には花庭があり、年中いろいろな花が咲いていた。その中でひときわ美しかったのは、海棠である。故郷を離れて暮らすようになって、私はいつも父が愛した花庭、あの海棠の花を思い出した。懐かしく恋しい風景の一齣である。庭は広く孟宗竹がうっそうと繁り、柿、すもも、いくり、山桃、蜜柑などが実っていた。

### 三 進学

月日は流れ、私も女学校受験の時期になった。第一志望の県立女学校は失敗し、第二志望の宇部市にある私立女学校に合格した。その学校までは、汽車でふた駅。それから電車に乗り継いで、一時間ぐらいかかった。毎日のように駅まで徒歩、汽車と電車で疲れて帰宅すると、決められた仕事が残っていた。

二年生のころの夏休み前のある夜、勉強していると、継母から数学の成績が悪いと長々と説教された。その夜私は眠れず、小さいときからのこと

を思い出し、悔しさと情けなさに、家を出てどこか仕事を見つけて自立しようと思いい立った。

#### 四 ささやかな反抗

翌日朝、制服を着て学校に行く格好をして家を出た。お金は無いが定期がある。学校のある宇部市までは行けた。街に着いて職を探し始めたが、不景気な戦争の最中、わずか十四歳の少女が考えるほど甘くはなかった。街の中をあっちこちと歩き回って、やっと一軒の呉服屋さんのガラス戸に「十六歳以上の女性を求む」の張り紙を見つけた。私はその店の前を何度か往復し、意を決して中に入った。「雇ってもらえませんか？」私のお願いに、呉服屋のご主人は何も理由を聞かず、「保証人が要るから、本籍と名前を書いて」とだけ言って、私を棟続きの食堂兼喫茶店に連れて行き、働いているお姉さんたちに「今日から面倒を見てやってくれ」と頼んでくれた。三人のお姉さんたちは、親切で優しくかった。制服だけの私に、着る物をあてがってくれ、夜は一緒にお風呂に入り、

背中を流してくれて親切に面倒を見てくれた。私は今まで食堂や喫茶店に入ったことも無かったので、メニューを覚えるだけでも大変だったが、やっと家を離れることができたという幸福感でいっぱいであった。

一週間が過ぎたある日、突然主人に呼び出されて二階に上がってみると、吃驚仰天！なんと継母が仁王様のような顔をして睨んでいるではないか。私の書いた本籍地に、確認のため使いの者が行ったのだ。意外だった。あの継母から逃れることができたとはばかり喜んでいた私は、泣く泣く家に帰った。

ようやくして、学校から呼び出しがあった。当時としては珍しい女校長で、厳格な先生であった。継母は校長先生の前で、「親不孝な娘、親の教えを守らない、心配をかける子」と私を罵倒した。校長先生は「そんな不良少女は我が校の校風にそぐわない」と即退校処分となった。担任の先生が校門まで送って下さり、「退校とは、もう学校に

来れないということなんだよ」と言って、涙を拭いておられた。もし実の母であつたら、お詫びを言つて許してもらえたのではと、口惜しい思いで帰途についた。

夏休みが終わり、高等科二年生に逆戻りした私は、村の恥かきつ子になっていた。

#### 五 生家を離れたい一心で

学校に、父の教え子だったという先生がおられ、ある日教員室に呼ばれて「高等科を卒業したら、満州に行つて看護婦にならないか」と話された。

私は少しでも早く生家を離れたかったので、即承諾した。満州がどんな所か知らなかったが、ただ継母のもとを離れたい一心であつた。

継母に内緒で受験をした。しばらくして合格の通知が来て、継母は激怒したが私は何が何でも行くことを決心した。

#### 六 中央医院附属看護婦養成所へ

念願の村を離れる日がきた。下関まで見送りに来た継母はどう思ったのか、目を赤くして泣いて

いた。

昭和十八年三月、私たち山口、岡山から集まつた生徒八人は一面坡訓練所の寮母、諸岡先生の引率でハルビンに向けて出発した。初めての船旅で、私は船に乗ったときから酔つて、釜山に着いて嘔吐を繰り返した。途中新京（長春）の訓練本部に立ち寄り、三日目にハルビンに到着。青少年義勇隊ハルビン中央医院、附属看護婦養成所第三期生となつた。

私たち三期生は全員で二十三人、現地組が十五人、内地組が八人であつた。奥、大久保、岡崎、柴垣と私が山口県から、竹藤、広政、加藤が岡山県からであつた。

私たちは、現地組より一カ月くらい早くハルビンに到着し、吉林街の分院で暮らしたが、舎監殿より毎夜のごとく長唄の鑑賞に招かれた。まだ十四歳の少女たちは長唄など聞いたこともなく、きちんと正座して聞くのがつらかつた。長い唄がお経や念仏に聞こえ、足はしびれる、あくびは出る、

果ては眠くなる始末で、懸命に唄って下さる舎監殿に、不しついで無礼極まる生徒だった。

授業が始まったころであった。三期生をトイレの前に並べて「これが水洗トイレです。用便のとき、便器を汚さないように。一年生は水洗便所は初めてでしょう。もし便器が汚れていたら一年生に違いないので、一列に並べて肛門の穴が曲がっていないか検査をします。曲がっている人が便器を汚すのですから」と恐い訓示であった。肛門の穴を調べられたら大変と、便所に行くたびに緊張した。

ある夜、私は床を敷いてから寝間着の袖が破れていたことを思い出し、大久保から針を借りて縫ったが、縫い終わった針をどこに置いたか忘れてしまい、いくら探しても見つからず消灯になった。一緒の寝床で寝ていた大久保に文句を言われながら横になったが、こともあろうに大久保のお尻に、ブスツと針が刺さった。幸い針は即抜き取り、こ

と無きを得たが、私は二度と大久保の布団には入

れてもらえなかった。  
私たちはおやつもなく、いつも空腹であった。そこで夜点呼が済むと炊事場に行き、翌日のご飯に混ぜるために煮てある小豆を、数人が毎日順番で失敬して来た。ボーイに見つかり、「ドロボー」と罵られたこともあった。配給の砂糖にまぶすと、高級なおやつになった。

中央医院の院庭は、各病棟の前に一、二本大きな榆の木がそびえ立っていた。昼間は生徒たちが休憩時間にバレーやドッジボール遊びに興じたり、年二回の運動会も行われた。私たちは、暇さえあればボールを持ち出し、ドッジボールを楽しんだ。  
ある日のこと、私たちの遊びを眺めていた西病棟二階の患者と、北病棟耳鼻科の患者が大声で「オーイ」と呼び掛け、奥吉子のおでこをもじった数え歌を交互に歌った。奥吉子がカンカンになって怒った。「だれよ、あんな歌を作ったのは」私たちは一緒に笑った。奥吉子は小さくて幼顔で、おでこ目鼻口が整った皆の人気者であった。

ある日、私は奥と二人で秋林会社の横のマーケットに買い物に行った。背の低い二人は結構目立った。突然、買い物に来ていた若奥様が、連れの方に「ねー奥さん」と声を掛けた。連れの方が「ハイ」と返事をされると、同時にうちの奥もありつたけ背伸びして、「ハイ」と大声で答えたのである。呼んだ方も答えた方も、周囲の皆も啞然として、私たち二人連れに視線が集まった。私は恥ずかしくて、急いで奥を引っ張って外に出た。「だってあの人、奥さんと呼んだでしょう」と、当の奥はケロリ。お茶目な奥であった。

昼間、賑やかだった院庭も、夜ともなれば樹陰がうつそうと長い影を作り、夏の夜は開け放たれた病室の窓々から、尺八やハーモニカ、ギターが流れ、寂しく切なく、もの悲しいメロディが流れて、人々の心に郷愁を呼んだ。

一年生のころは、講義が大半であった。講義が終了すると、それぞれ配属になっている部署に戻り、先輩から言いつけられた作業をする毎日であ

った。日赤から来られた河合婦長の目が光っていた。

#### 七 悲しい出来事

西一階の外科病棟に、背が高く美男子で尺八の上手な患者が、盲腸の手術のため入院していた。手術当日、同室の患者さんが「頑張つて。帰り待っているよ」と見送った。無事盲腸が切除され縫合にかかったときに、突然激しくけいれんを起こし全身硬直して激しく震えだし、先生と看護婦の必死の処置も空しく息をひきとった。後に、彼の既往歴にてんかんがあることが分かった。私は尺八だけがベットの残されている病室に入ったが、胸が引き裂かれる思いであった。

二年生になって、西病棟三階勤務となり、当直の勤務に就いた。ある夜、水野さんという訓練生が亡くなった。ブザーが鳴って病室に行くたびに、瘦せ細った水野さんは「苦しいよー！ 苦しいよー！」と言う。背中を撫でてあげるより他には方法を知らない看護婦の卵の私。暑い夏の夜明けに、



息を引き取った。本当にかわいそうだった。

その年の冬、嫩江訓練所に大量の発疹チフスが  
発生し、中央医院から応援を派遣することになり、  
私は二期生の出村さん、一期生の佐藤京子さんと  
嫩江訓練所に向かった。

一段落してハルビンに帰ってしばらくすると、  
私は発熱し発疹チフスに感染して、東病棟に隔離  
された。その部屋に、一期生の佐藤アヤ子さんが  
やはり発熱と頭痛で入院していて、「頭が痛い」  
と苦しんでおられ、一期生の方が懸命な看護を続  
けたが、甲斐もなく数日後に亡くなった。同じ発  
熱でも、私の方は和田院長先生の診断で「お前の  
心臓は人の倍大きい」と笑われ、心嚢炎と分かり、  
本館二階の病室へ移された。ここでは、一期生の  
加納美都子さんと一緒に、後に三期生の氏が結  
核で入って来た。東病棟とは違って変わり明るい  
部屋であったが、加納さんの病状は日ごとに悪化  
していた。内地から、お姉さんが付き添いに来て  
いた。優しいお姉さんで、一生懸命看護されて、

私たち看護婦のお手本のような方であった。加納  
さんは、亡くなられる二、三日前からひどく神経  
質になり、むずかかっておられたが、お姉さんの懸  
命な看護の甲斐無く、翌日息を引き取った。仲の  
良い姉妹であった。

私は毎日三十九度からの熱が続き、心臓が苦し  
かったが、そのうちに熱も下がり元気になった。  
そのころ、同じ病気で入院していた訓練生が一人、  
二期生の小寺さんもこの世を去り、私一人が生き  
残った。悪運の強い奴だと自分でそう思った。病  
気で入室の最中に、卒業式が病室の隣の第二講堂  
で行われた。

#### 八 「みさご」の由来

ある日、平川先生の引率で博物館の見学に行っ  
た。鷲や鷹などの鳥類の剥製を陳列してある部屋  
で、突然「おい内田、お前がおるぞ」と言われて、  
見るとそこに真つ黒な大きな鳥の剥製があり『み  
さご』と書いてあった。同級生たちは「あつ、内  
田さんだ」と皆で指を差して爆笑した。私はそれ

まで自分の名前の由来を知らず、変な名前だと思っていた。父は釣りとお海が大好きで、自分で小舟を買って海に漕いで行っては釣りをしていた。父はきつと、その海で自由自在に勇ましく大海原を飛び回る海鳥『みさご』を見たのであろう。そして自分の娘にも、世の荒波に負けず雄々しく生きてほしいとの願いを託して、『みさご』と命名したに違いない。父との会話はあまりなかったが、父の深い慈愛に感動した。

新鮮な毎日、紺の制服、冬はシューバーに防寒靴、阿什河街の病院から吉林街の宿舎への往復、優しい先輩たち。私の暗かった心は、本来の明るさを取り戻した。

教練の時間に、平川先生の引率で太陽島に行き、ピクニック気分で思っきり太陽を浴びた。十二月二十五日の復活祭では松花江の水で十字架を作り、冷たい水に飛び込んで、洗礼を受けるクリスチャンの祈りを目の当たりにし、イエス様への信仰に感動した。

ハルビン中央病院には、産婦人科と小児科は無かった。二年生になると市立病院へ見習いに行った。私は三回行ったが、三回とも逆子の分娩に出くわし、妊婦の苦しみを実感し恐怖を感じた。

#### 九 寧安訓練所病院へ

五月末、寧安訓練所病院へ同期の佐藤末子と二人に派遣命令が来た。思い出多いハルビンに別れを告げることになった。エキゾチックな街ハルビンよ、さようなら。懐かしさと恋しさで涙が止まらなかった。

東満の自然は美しかった。ハルビンから牡丹江まで、見たことの無い素晴らしい景色を愛でながら牡丹江で乗り換え、東京城に向かった。不慣れた旅であったが、ちょうど寧安訓練所に帰隊する成沢中隊の訓練生と一緒に、楽しい旅になった。東京城の招待所に一泊。翌日トラックの迎えを受け、揺られること一時間余り。寧安訓練所病院に到着した。早速、村田院長にごあいさつ。院長先生は、背筋がピンと伸びて気力にあふれ、闊

達な方であった。職員にも厳しく、患者がいないときなどは両腕を腰に当て、仁王様のように廊下に立っておられた。

夕方先輩看護婦さんに誘われて、野原に散歩に出て吃驚した。黄昏の野や丘陵に、ポーと白いものがあるので近づいてみると、しゃくやくが咲き乱れていた。つつじが山いっぱい咲いていて、迎春花も足元にいくつも咲いていた。本当に美しい風景であった。

昼食は職員食堂で食べた。主食は訓練生が炊くが、副食は看護婦が作るようになっていた。私は料理が苦手で、当番のときはワカメとキュウリの酢の物を毎回作った。そのうちに、院長先生が「今日は内田の当番だな」と言われるようになり、見かねて婦長さんがときどき手伝って下さった。

訓練所では大和神社の年一回のお祭りがあった。私も出掛けたが、だれかに御神酒を飲まされて、その夜発熱をし、肋膜炎ということで入院となった。赴任して一カ月も経っていなかった。

#### 十 ソ連軍満州に侵攻・終戦

八月九日、ソ連軍の侵攻が始まった。八月十二、三日ごろ、在郷軍人に召集令状が下り、牡丹江へと発って行った。訓練生もほとんど出払っていたが、翌日には全員戻って来た。そして、それから私たちの逃避行が始まった。これから出発というとき、「万が一に捕虜になるような目に遭ったら、これを飲め」と、ひと包みの毒薬を渡された。銃も渡され、病院を出発した。少しばかりの食糧と衣類を背負って、鏡泊湖を目指した。ソ連軍は、既に国境を越えて侵攻して来ていた。振り返ると、訓練所病院、訓練所本部にも火煙が上がっていた。心の中にぽっかり穴があいたようだった。

照りつける八月の太陽の下の逃避行は苦しかった。歩きながら荷物を捨て、だんだんと軽くした。それから三日ぐらい経った。「ソ連兵がやって来るぞ！」と声がかかった。それと同時に、ソ連軍の戦車が白旗を掲げ、車上のソ連兵が投げキックスをしながら通過して行った。

戦争が終わったというニュースは満人部落で聞いた。「戦争が終わった。日本が勝ったに違いない。それならば訓練所に帰ろう」という幹部の判断で、また訓練所に向けて行軍が始まった。しばらくすると、先頭の方で鈍い銃声が轟いた。幹部たちが駆け付けると、先遣隊の五人がソ連兵に撃たれ、倒れていた。しばらくすると、ソ連軍の戦車隊の兵隊が通訳を連れてやって来て、日本の無条件降伏を知らせ、武装解除された。栗田訓練所所長は馬から降ろされて、ソ連兵に連行された。

私たちも皆捕虜の身となり、銃剣を突き付けられて東京城に向けて歩き始めた。

#### 十一 ソ連軍の残虐な行爲

東京城に着くとソ連兵は男女を別々にさせ、男子を一列に並べ、背の高い順から三分の一ぐらいをどこかに連れ去った。

東京城に行く途中からソ連兵の略奪や強姦が始まった。ある夜、馬小屋だった所に泊まることになり、かばい合うようにして輪になって眠ってい

た。すると、「マダム、ハラシヨ！」と言いなからソ連兵が入って来た。真っ暗闇の中、恐怖と驚愕で立ち上がることができず、這いつくばって逃げ回った。お尻を懐中電灯で追い掛けるソ連兵。私と先輩は、避難前に渡されていた毒薬を「もう飲もうよ」「もう少し待って」「いや、飲もうよ」と言いながら逃げ回った。その中に、だれかが「ギヤァ！」と悲鳴をあげ、騒ぎがおさまった。だれかが犠牲になったのだ。

東京城に到着した私たち寧訓病院の職員と家族、十二、三人は、元日本人小学校に住むことになったが、既に大流行が始まっていた伝染病患者の看病をすることを命じられた。患者は、南下して来た避難民が主だった。私たちは義勇軍帽をかぶり、髪を短く切り、鍋底の煤を顔に塗って男に扮した。毎日死人がでた。担架に乗せ、元日本軍の壕の中に捨てた。数え切れない死体が野ざらしになっていて、疲れ果てた私たちは正気を失った。

#### 十二 ハルビンへ

昭和二十年十二月、私と先輩看護婦二人で猛吹雪の中を牡丹江まで歩き、無蓋車の石炭の上に乗ってハルビンに向かった。その途中の一面坡駅で、一枚だけ持っていた毛布をソ連兵に奪われ、着の身着のままハルビン中央医院にたどり着いた。ハルビン中央医院は既にソ連兵に接収され、私たちの宿舎であった吉林街に移り診療を続けていた。

数日休養した後、院長先生より「お前たちは新京の訓練本部に行き、そこで身の振り方を考えてもらえ」と命令された。切符はどこで手に入れたか記憶にないが、私は新京の訓練本部に着いて、とりあえず三カ月分の給料をもらい、指示された緑園地区の義勇隊の人たちが住んでいる所に行った。そこは元満鉄の官舎で、なんと寧訓の訓練生や幹部や職員が多くいて、安どの胸をなで下ろした。

私は日本人民会の指示で、日本人難民病院の分院に勤めることになった。しばらくして、日本人民会の会長が八路軍に銃剣を突き付けられて、医

療チームの八路軍への協力を強要された。三カ月ということで、三カ月の約束ならと私たちも承諾した。

### 十三 八路軍に留用

出発の日に、二、三人の訓練生が見送りに来てくれた。私と一緒に集められたメンバーは、元東安陸軍病院の軍医、看護婦、満鉄のタイピストと電話交換手、薬剤師、開拓団の医師夫妻計三十人であり、集合して驚いたが、嫩訓病院の関根先生がおられた。嫩訓で別れて以来の再会であった。

私たちは蘇さんという通訳の引率で、新京から列車に揺られてハルビン、牡丹江を経由し、五月三十日の夜中に吉林に到着した。宿舎は民家であったが、疲れて倒れるように眠った。

配属の部隊は八路軍第一縦隊野戦病院一所（後の第四野戦軍三八軍）であった。

翌朝から六時起床、点呼の後駆け足。文化幹事という人から八路軍の軍規「三大規律、八項注意」の歌を教えられ、政治委員の政治教育などが始ま

った。蘇さんは国民党軍の捕虜だったが日本語が下手で、政治委員の話もよく分からなかった。

吉林から延吉に移動していたとき、一緒に参軍したタイピストの戸高さんが結核で亡くなった。

#### 十四 野戦病院

野戦病院であるから、ほとんどが二、三日、長く一週間駐屯して、すぐまた前線に向けて移動した。駐屯地では、前線から送られて来た傷病兵の傷の処置をして、後方の兵站病院へ護送した。移動は全部徒歩、炊事用具や医療用機器材料は櫛や馬車で運搬した。行軍は自分の衣服と毛布、洗面道具を、四角に折り畳んだ毛布の間に入れて梱包し、自分で背負って歩く。途中食事も摂れず、携帯の生米をかじりながら一晩中寝ずに歩いたこともあり、冬は雪で滑る道を必死になって歩いた。夜間はランプの灯りで手術をした。ほとんどが、弾丸で負傷した足や腕の切断であった。軍規は厳しく、行軍でどんなに疲れていても、宿舎に割り当てられた百姓の家の庭の掃除、水汲みなどを手

伝った。

参軍した翌年の四月一日、部隊は一時牡丹江に駐屯し、それからまた転戦が始まり、連日の行軍につらい日々が過ぎた。

参軍して三年ぐらい経っていた。朝から夜中まで働き詰めであったので、私は体調を崩してしまった。膝をつくとか所激痛があり、だんだんと痛みが激しくなった。見ると、右膝の下が二センチメートルばかり腫れていた。早速軍医に診てもらい注射器で穿刺すると、中から黄色の膿が出て、結果は右脛骨結核と診断され、早速所長の執刀で手術をした。

そのころ、沈陽攻撃の日が近づいていた。部隊は戦闘参加のため、移動することになった。ぽっかり開いた傷口は癒えず、後方病院に送られることになり、所長は「きつと迎えに行くから」と、私を担架に載せた。私は、元牡丹江満赤病院であった八路軍の後方病院に入院した。そこには元日赤の医療チームが大勢いた。私の傷は何度手術を

しても塞がることはなく、難治の結核性ということであった。

一九四九年十月一日、中華人民共和国が誕生した。八路军は中国人民解放军と改名し、私たちも解放記念勲章をもらった。

骨結核を患っていた私は、計九回も手術台上に上がったが、どうしても塞がらない傷に私は「日光浴」を試してみようと思いついた。病院の外の野原に出て、傷の部分だけ出して十分から十五分ぐらいの日光浴を毎日行った。二カ月ぐらい経つと奇蹟が起こり、傷口がだんだん小さくなり、遂に塞がったのだ。結核菌は、日光に弱いことを初めて体験した。

傷は完治したが、部隊はどこに駐屯しているのか分からず、原隊に帰ることができなくなった。院長の計らいで牡丹江軍区病院に勤務することになり、世話になった看護婦たちと一緒に働くことになった。その後、第十二後方病院と改称され、阜新に移転した。

当時、私たちの政治指導をしていた劉という政治指導員と本多さんが恋仲になった。当時、恋愛も結婚も禁じられていたが、本多さんは妊娠してしまった。そのことが発覚して、高野という日本人の政治学習を担当していた民族幹事が、群衆大会を開いて本多さんのことを「日本女性の恥だ」と言って痛烈に批判した。

私は本多さんがかわいそうで、この人たちの文通を秘かに手伝った。後で沈陽の日本人民会に託された。

#### 十五 地方病院に転属

一九五二年ごろ、私は部隊から地方の病院に転属になり、沈陽に集合した。私はすぐに、本多さんに会いに行った。本多さんは女の子を出産したばかりで、土間の筵の上で寝起きしていた。恋人と離されて筵の上で出産し、食べ物もなく寒さと飢えてオッパイも満足に出ず、本多さんも赤ちゃんも痩せて親子で泣いていた。これが日本人民会の仕打ちであった。

その後、本多さんは赤ちゃんが三カ月になったので、日本人のみを収容する東民病院に勤務することになり、地獄から脱出することができた。

私は、東北電器管理局附属医務所に配属になった。三カ月という約束で参軍したが、結局は六年余りを過ごし、やっと解放され地方人となった。

そのころ、積極的に学習を指導しているKという青年と出会った。その知識の広さ、理論レベルの高さに心をひかれて、何度かデートを重ねているうちに、結婚を意識するようになった。そのKの会社が阿城という所に移転したので、私も人事課に阿城への転勤を要請して、私はKと結婚した。

だが私はまだ結婚という意味がよく分かっていなかった。しつこく夫婦生活を求めるKに驚き、やっと結婚とはこんなことかと恐怖感を抱くようになった。彼二十八歳、私二十三歳であった。家族宿舎もなかったので別々に住んでいたが、彼は人目をばからず、草むらでも私を押し倒した。恐ろしくなった私は、法院に苦痛を訴え、離婚。

その結婚は三カ月で終わった。朝鮮戦争の真ただ中であった。

ホツとした私にまた不幸が待ち受けていた。左膝に結核の炎症が起こった。連日の高熱と大変な痛み。上司に嘆願して、本多さんが勤めている沈陽の日本人を収容する病院に入院させてもらい、久々に本多さんと再会し、貴重なストマイを何度も注射してもらって、手厚い看護を受けた。

そのころから日本人引揚げのニュースが伝わり、その病院も全員引き揚げるので閉鎖されることになった。私には引き揚げの所が無い。あの恐ろしい継母の所へは帰りたくなかった。

#### 十六 プロポーズ

迷いに迷っている最中、たびたび見舞いに来てくれていた王さんが、「家をもらって一緒に住まないか」と提案してきた。その王さんとは、お姉さんと妹が看護婦として沈陽に居住していた関係で知り合ったが、結婚の恐怖が完全に拭かれていない私は、離婚の原因を何回も繰り返し話した。



「大丈夫、乱暴はしない。あなたを守る。あなたは病人なんだから、安心して養生すればいい」と約束してくれたので、私の心が動いた。私も王も二十四歳であった。

帰国する本多さんたちと別れた私は、沈陽市鉄西区の家族宿舎に入った。王は上海人で、中学教師と作曲をしている父親から厳格に育てられた。

王は五人姉妹の一人息子であり、父は反日派で日本大嫌いの人で、私との結婚には大反対であった。そこで、三番目の姉が上海に行き父親を説得してくれた。帰って来るとき、母親から結婚祝いとして金の指輪を持たせてくれたが、その指輪は生活費としてすぐ消えてしまった。

私の体が癒えるまでと、王はずっと独身宿舎に住んでいたが、休みを取っては私の病院通いの手助けをしてくれた。私の健康は回復していったが、膝は完全に治癒しなかった。

一九五三年に引き揚げて行った友や本多さんなどから便りが届くようになり、「日本は医学が進

歩している。国費で治療してもらえ。一度帰国して治療を受けては」という意見がどの手紙にも書いてあった。そこで、一旦帰国して治療を受けることを王と王の姉妹に相談し、同意を得て手続きを取った。

帰国してみると、継母はとつくに親戚の叔父と再婚していた。

#### 十七 足の治療・日本に一時帰国

昭和三十年四月、舞鶴には各県の代表が迎えに来ていた。私は実家には帰らず、岩手の本多さんの家に行こうと思っていたが、迎えに来ていた県代表が私の父の教え子であり、兄と連絡をしてくれていて、心ならずも兄の家に引き取られることになった。当時、兄は佐賀関精錬所で役職にあった。だが、他人様のような兄の家に帰るのは、不本意であった。

案の定、共産主義の国から妹が帰って来て、しかも病氣療養中だなんて恥ずかしく、体裁が悪いと考えたのか、大分から極秘に車で自宅に連れて

行かれた。私は外出を許されず、外出するときはいつもだれかがついて来た。そのうちに兄嫁が、私が結核性の病気であることで感染を恐れて、家の中で私を隔離するようになった。治療目的で帰って来たのに、一度だけ別府の大病院で診療を受けただけで、国費で治療を受けられるなど、とんでもない話であった。自費で私の長くなる治療費の負担は堪えられないはずもなく、そのまま放置されたが、私は逆境に負けずいつの間にか普通に歩けるようになっていた。私は、中国に婚約者がいることを兄に話した。兄は「内田家の恥だ。日本で結婚して暮らせ。どうしても中国に帰るのなら、兄妹の縁を切る」と言って怒った。

恐ろしい日本にいるのが嫌になり、一年と少しの滞在であったが、これ以上何も起こらないうちに、王の所に帰ろうと思うようになった。

#### 十八 再び中国へ

当時、興安丸が帰国日本人と中国に帰る華僑を乗せてまだ往き来していたので、出国手続きは簡単にできた。当時、王は沈陽から北京電器科学研究所に転勤しており、天津まで迎えに来てくれた。私はそのまま電器科学研究所の医務室で働くことになり、多忙な日を過ごした。

北京では、休日にトロリーバスに乗って郊外へ観光に出掛けたり、帰って来た喜びを味わった。

#### 十九 保定市大型変圧器廠に転勤

昭和三十四年、私たちは河北省の保定市の大型

私はひとまず外に出て働いてみると言って、帰国時に私の帰りを新聞で知っていつでも来いと連絡のあった、寧訓病院の歯科医であった楊先生の所に身を寄せた。

それから、解放軍時代一緒に苦楽を共にした、桜井先生のお世話で、名古屋の病院で働くことに

変圧器廠に転勤になった。王は技術部に、私はその医務所に配属となった。

保定市に到着して間もなく、洪水と旱魃かんばつが続き、食糧の配給が滞るようになった。国营の商店は、ガランとして何も売っていないので、空腹に耐えられず、自由市場（闇市）で買い物をすると、当時私の給料が四十八元ぐらいであったが、豚肉一斤（五百グラム）十元くらいした。熟し柿一個五元、おいしいものは給料後の一、二日しか食べられなかった。暇を見つけて畑に行き、百姓の収穫し終わった後の白菜の根を拾い、サツマイモの屑を掘って食べた。

保定では、連日勤勞奉仕が続いていた。会社を建設するための道路作りに、全国各地から続々と転勤して来た人たちは、毎日汗と油で真っ黒になり働いた。それに月一度、日曜日に順番で、麦刈り、芋掘り、野菜の収穫など、農民の手伝いに駆り出された。当時は人民公社制であった。

ある夏、雨が降り続き山のダムが決壊した。会

社、宿舍が大洪水に見舞われて建物の一階が水浸しになり、その水が引くまで二日間かかった。このことがあってから、市の計画で堤防を築こうと、市民、各会社の社員全員が動員されて勤勞奉仕が始まった。会社では皆親切で優しくかった。子供たちも私に懐いて、私でなければ予防注射は受けないと泣く子もいた。

文化大革命が始まる少し前からだったから、一九六五年ごろからであろうか、中国の人口が増え過ぎて、「計画生育」という運動が始まり、避妊を奨励するようになった。医務所にも計画生育科（計画出産）という科ができ、産婦人科の医師が担当した。

## 二十 頭の良い犬・黒々

そのころ、私は北京から連れて来た猫の味々と、保定に来て靴屋さんにもらった犬の黒々とを飼っていた。当時の中国では、伝染病予防、食糧の浪費という理由で、一切の動物の飼育が禁止されていたが、私たちには党委員会も周りの人たちも目

をつぶって黙認してくれていた。当時は、毎日歩いて一時間掛かる医務所に通勤していたが、しばらくして会社のバスで通勤するようになった。

黒々は毎日バス停まで送ってくれ、帰るころには停留所まで迎えに来ていた。ある日、私がバスに乗り遅れ歩いて帰宅する羽目になったとき、迎えに来ていた黒々がちよつと道路に出た途端、トラックにひかれてしまった。動物飼育禁止の中国には獣医はいない。恐らく内臓破裂だったのだろう。お腹がだんだん膨張して、夜中に起きてみると苦しそうにあえいでいた。「黒々」と声を掛けると、「くーん」とひと声甘えるような声を出し、差し出した私の手の上に頭を落として息を引き取った。

しばらくして自転車を購入し、夫が運転し私は後ろの荷台に乗って通勤することにした。初めて人を乗せて走る体力の無い主人が、私を乗せて走るのは無理だったのか、フラフラ運転する荷台に乗って会社に急いでいた私たちは、猛烈な自転車

ラッシュに遭い、私は他の人の車輪に足を巻き込まれそうになり、思わず引つ込めた足が、今度は自分の車輪に挟まれた。知らない主人は、腰を上げて力いっぱいペダルを踏んだので、私は車輪に挟まれて振り落とされ、主人も横倒しになった。

私の右足は、みるみるうちに腫れ上がった。市立病院に運ばれ、レントゲン検査で足骨骨折と診断され、ギプスが巻かれた。ベットが無く入院できず、自宅静養となった。

保定に来て災難が続いた。

二十一 ひとときの幸せ

私が保定に転勤になって半年くらい経っていたある日、宋換元という、東京から帰国して来た台湾出身の華僑が、日本人が保定にいるということを知り、私を尋ねて来た。宋先生は日本に留学していた歯科医師で、帰国華僑総会の主席も兼任しておられた。奥さんは静岡県出身の日本人であり、歯科の技工士で、一男五女の賑やかな家庭であった。このご一家には、大変お世話になっ

た。奥さんは料理上手で穏やか、いつも笑顔の絶えない人で、土曜、日曜になると、日本、インドネシア、ベトナムなどからの帰国華僑、五、六人が宋家を訪ねていた。

私も奥さんが作る日本料理を頂きに土曜、日曜には必ず訪れていた。この日だけの日本語でおしゃべりできる楽しみは、何にも替え難い幸せであった。その二番目の娘さんが特に私と気が合い、仲良しであった。

## 二十二 文化大革命

一九六六年五月、文化大革命運動が突然起きた。資本主義思想、反革命分子の摘発、これを民衆がやるように通達が出た。上層部の幹部の自宅や職場には、「大字報」という壁新聞がベタベタと貼られ、資産家出身、地主出身者など次々と摘発された。帰国した華僑はインテリが多く、当時は「祖国建設のため」というスローガンで帰国したのに、インテリは資本主義思想だと、今度は逆に批判闘争の対象となった。連日、三角帽子をかぶせられ

後ろ手に縄を掛けられた人々が、街中をひきずり回された。保皇派と造反派に分かれ、互いに罵り合い、果ては銃を撃ち合うようになり、学生は紅衛兵の赤い腕章をつけ、全国各地を無料で旅をして歩いた。これを「串連」と言い、互いに革命精神を学び、意見交換するという目的だったが、反対の派閥に出会おうと武力行使となり、全国では数え切れないほどの若者が命を落とした。私たちに、毛沢東語録を暗記させられた。「明日までにここまで暗記してくるように」と言われて、完全に暗記できなければ勉強が足りないと言われ、反省会が開かれる。自分の欠点を一つ言おうと、それに対して根掘り葉掘りの批判が始まり、明日はこれの意見に対して自己批判をしなさい、ということになる。会社の党書記でも造反派は紅衛兵の指揮下では手も足も出ず、みじめな存在であった。「思想改造してこい」と言われれば、思想改造という名目のもとに、インテリも農村に行かされて労働を強いられた。それを「下放」と言った。

華僑は当然国外から自転車や外国製品を持ち帰っている。紅衛兵が来ると、「それは資本主義国家から持ち帰った物だ。即捨てるかその横文字を消せ」と言うのである。華僑たちは、自転車や菓子の缶などの横文字をマジックで真っ黒に塗りつぶした。

宋先生の家では下の二人はまだ幼かったので、串連には行かなかったが、上の四人は皆出掛けて行った。あちこちで紅衛兵の撃ち合いのニュースが入ってくるたびに、出て行ったきり音信の無い子供たちの安否を気遣って、奥さんの髪の毛は心配のあまり白髪が増えてしまった。

ある日、反革命分子を銃殺するので見学に来るようにとのお達しで、渋々出掛けて行った。大勢の見物人が銃殺場を取り囲んでいた。後ろ手に縛られた六人は目隠しをされ、「槍斃（撃て）」の号令で一斉に血しぶきを上げて倒れた。私はショックで卒倒しそうになった。「誰也不要関、関了就是反革命（だれも関わるな、関わったら即反革命

だ）」という命令で、家族も友人もだれもその死体を葬ることはできず、死体は野ざらしとなった。

### 二十三 渠所長からの質問状

ある日のこと、私は所長から呼び出しがあった。「これから君の家に行つて話があるから、家で待っているように」と言われた。やがて紅衛兵二人を連れてやって来た。

① 日本と文通しているが、どんな情報を買っていたのか？

② 阿城にいたとき、会社の社長とどんな関係があったのか？ どんな情報交換をしたのか。

③ 大連や新郷（河南省）の友人の所に出掛けて行って、何の用事で何の情報交換をしたのか。

④ 自分の反革命思想、資本主義思想を反省しなさい。今からトイレ以外は外に出ることは禁止。毎日家で自分の態度について反省文を書け。

と宣告された。私は驚いた。前任の王所長が快活な性格で好きであったが、現在の渠所長は陰気

で腹黒く、転任して来たときから大嫌いであった。

「①の文通は確かにしていたが、ほとんど叔父一家とであり、世間一般の生活内容であった。

②の阿城にいたころの社長は朝鮮族の方であったが、格式が高く、話をしたことは一度もなかった。

③の友人は親しい友人だから会いに行っただけだ。

④私は八路軍出身で、解放戦争を兵士と一緒に前線で戦ってきた人間である。政治問題で云々されるいわれはない。」

と答えた。それでも渠所長は「そんなことはない。とにかく自分の悪い思想を検討しろ」と毎日やって来ては強要した。

私の監禁は一週間も続いた。後になって聞くところによると、周恩来首相から、外国人を政治運動に巻き込むというお達しが出ていたそうで、北京にいた外国人は、最初の中だけ混乱したが、

間もなく被害はおさまったようである。

保定の造反派や紅衛兵は、中央の命令を聞かず、外国人華僑に迫害を加えていた。大体造反派というのは地位の低い、うだつが上がらない者が、これを機に人を踏んづけて、自分が上にあがろうとした、下心のある者ばかりの烏合の衆であった。

監禁されている中に自宅捜査が入り、日本から送ってきた週刊誌や暮らしの手帖、レコードなどを全部没収された。レコードはスパイ活動の暗号になると言うのだ。事情を知った宋先生の娘さんが、紅衛兵の目を盗んで自転車で迎えに来て、私を自宅にかくまってくれた。奥さんの危険を冒しての厚意であった。宋先生一家と親しいことを知っていた渠所長は、造反派の二人を差し向け、私を探しに来て「内田を出せ」と銃を突き付けた。宋先生は「お前たちは何者だ、勝手に人の家に入ったら家屋侵入で訴えてやる。内田は悪いことはしてない。何のために探しに来たんだ」と、大声で怒鳴りつけた。結局、造反派は尻尾を巻いて立ち

去って行った。宋先生は立派な保皇派であった。

保定に配属されていた日本からの帰国華僑は、皆監獄にぶち込まれたり、農村に下放になったり、思想改造のためという理由で不当な扱いを受けた。これらの原因は、四人組の指導者、江青女史の「日本人にはスパイが多い」という一言にあったという。

#### 二十四 昨日の友は今日の敵

国内事情も、自分の都合のいいことしか報道しないので、国外のことは一切国民の耳に入ることには無かった。日露戦争時の流行語に、「昨日の敵は今日の友」という言葉があったが、私の場合「昨日の友は今日の敵」であった。昨日まで、「内田大夫（内田先生）」と言って寄って来た人たちが、今日は私のすること無いことの告げ口をして、上司のご機嫌をとり、反省、検討と追い詰められた日々を送ることになった。だが、こっそり私を支援して勇気付けをしてくれた人、陰で私をフォローしてくれる友がいたことは、忘れることができ

ない。

主人は大学時代電子工学を専攻していたので、当時普通では買えない短波の入るラジオを自分で組み立てていた。ある夜ラジオを聞いていたら、重大ニュースが耳に入った。田中角栄総理が、北京で周恩来首相と国交回復のサインを交わしたということだった。私は、思わずラジオを抱きしめて泣いた。暗黒の時代がやっと通り過ぎて行った。自国の大使館の無い国民は、どんなことがあっても訴えて行く所が無い。哀れであった。やがて北京に日本大使館が設立され、私は田中角栄さんは神様だと思った。

私も市公安局に帰国の申請をしたが、そんな手続きはできないと拒否された。だが、港には大勢の日本人が座り込みをしていた。結局その人たちを先に帰して、私に出国許可が出たのは帰国申請してから二年が経っていた。宋ふみさんは、私より一年早く帰国した。

#### 二十五 帰国の途につく



一九七五年七月一日、主人と日本での再会を約して、私は一人帰途についた。そのころは、もう東京―北京間の飛行機も飛んでいた。朝五時に起きて北京のホテルで朝食を摂り、昼食は機内で日本食を頂いた。まるで夢の中であった。関東地方以南に帰る者は大阪空港で、以北の人は羽田空港で降りた。

上空より大阪の街が見え始めると、皆一斉に「故郷」を歌い始めた。「……兔追いし彼の山、小鮒釣りし彼の川……」だれの頬にも涙があふれ出ていた。止めどなく、とめどなく流れる涙をどうしようもなかった。

中国で、村には日本人が一人しかいなかったという中国人夫妻が二、三人いて、その人たちは日本語を忘れていた。私はその人たちの通訳に残されたが、迎えに来てくれた従姉と最後に空港をあとにした。

満州に渡って三十二年間、中国での生活であったが、楽しかったことよりも屈辱を受けた思い出

の方が多い。私は齢四十六歳になっていた。

意思強く生きんと思う、

青々と木々育ち行く、丘に立ちいて

帰国して、間もなく三十二年が過ぎようとして  
いる。

#### 追記

みさご（鵜）

海岸の岩に住む鳶とびに似た海鳥で、背中は暗い茶色、頭と腹は白色、翼は長く、鋭い爪で魚を捕って食べる。（ワシタカ科）眼には瞬膜という薄い膜があり、これが偏光フィルター  
の役目をして水面の乱反射を防ぎ、魚を発見しやすくしている。父の願い通り、結局は私の人生も海鳥「みさご」のごとく、強く逞しく世の荒波に負けることなく生き抜いてきた  
のだった。